



はじめに

キリスト・教会・秘跡

一 秘跡をめぐる①

竹山 昭

の愛に直面するのは、この人の愛が語りかける動作やうつつたえる動作のなかで表されるべきのみである。この動作によつて、私はこの愛のなかに入っていくことができるようになる(スキレベークス)

人と人との真の出会いはお互いに心を開いて歩み寄りことなしにはありえない。神と人との場合も同じように言えるが、ただ一つ異なる点がある。神は人間をはるかに超越するお方であり、被造物としての制約をもつ人間は自分から、自分の力で神と真に出会うことができない。神と人との交わりは、常に神ご自身が先にいつくしみ深く心を開き、会いに来ることによつてのみ、はじめて可能になる、という点である。この出会いは、神の側からは「自分をあらわし、与えること(啓示)、人間の側

開いてイエズスの言葉と行為を受け入れる(イエズスを信じる)ことは必要であった。ただ、まさにイエズスが真に人となった神のひとり子であることは、そのふるまいを通常の人間が帯びる存在様式の制約のもとにおくことを意味する。からだをもつ存在として、いつも「しるし」を通してのみ、人々に神の愛、神のゆるしを表すことができた。

ちやうどイエズスが当時の人々にとつて神との出会いをもたらす生けるしるしであったように...

からは神の歩み寄りを受け入れて己を託すこと(信仰)があるところに実現することになる。

神の啓示の最終的なかたちは人となった神のひとり子、イエズス・キリストである。こうして、神はその高みから地上に向かって呼びかけるからたちではなく、人間の生活のもっとも具体的な状況の中に人間としてそのひとり子を受肉させた。ナザレトのイエズスは、その具体的な人間存在のうちに人間に心開く神、呼びかける神、手をのばす神である。

死と復活を通して父のもとに帰ったイエズスは、それまでの制約のものにはいない。しかし、私たちはこの地上に生きるかぎりやはり根本的にしるしを通しての出会いという制約のもとにある。

最後に、あまり注目されない点であるが、秘跡は、これを授ける側にも受ける側にも、信仰告白と礼拝行為の最終たるものである。

「秘跡」と呼ばれてしるべきであろう。キリスト教会といわゆる七つの秘跡を一つのつらなりの中で解してはじめて、私たちの秘跡生活が生きてきたものになる。

当時の人々にとつて、イエズスとの出会いは神との真の出会いであった。イエズスの愛のふるまい、ゆるしの言葉はそのまま、神の愛の具現、ゆるしの実現となった。むしろ、そのためには人々も心を

七つの秘跡はそれぞれ個別の特徴をもつとしても、基本的に共通した点がみられる。第一に、根本的に、しるしとしての性格を帯びている、ということである。

イエズスは神の愛の具現であるばかりではなく、父への従順と愛に生きた。秘跡において、これを授ける教会も受ける信者も、この同じイエズス・キリストと出会い、これに一致すると信じてはじめて秘跡を授け、あずかる。そればかりではない。イエズス・キリストはその従順と愛を人類の初穂として生きた。その父への従順と愛を、教会は自らの活動において引き継ぐとする。人々をこの父への愛に今も生きるイエズス・キリストに一致させることによつて

「原秘跡 イエズス」

「私が、私に対するある人

人々の日々を従順と愛の奉獻に取り入れる。秘跡はその最も具体的な場である。

人々の日々を従順と愛の奉獻に取り入れる。秘跡はその最も具体的な場である。